

## 医療スタッフによる子育てハイリスク群への対応

岡山大学病院産婦人科 日本産婦人科医会岡山県支部  
岡山県不妊専門相談センター 岡山大学大学院保健学研究科

中塚幹也

### 1. 子育てハイリスク群の発見

●**飛込み分娩** 2008年3月、産科医療施設に対して、「かかりつけ医のいない妊婦」、「飛び込み分娩」に関するアンケート調査を施行した。2007年の1年間に、半数以上の施設で、「かかりつけ医のいない妊婦」、すなわち、妊娠22週以後に初めて産科を受診した妊婦を経験していた(17/32施設)。37週以後に初めて産科を受診した妊婦も26%に見られた。その内訳は、初妊婦が42%、経産婦が58%であった。

2007年の1年間に、1/3以上の施設で、「飛び込み分娩」(陣痛発来、破水して初めて産科を受診した妊婦)を経験しており(10/32施設)、分娩後の搬入も見られた。その内訳は、初妊婦が43%、経産婦が57%であった。また、2005～2007年の3年間では、半数の施設が、「飛び込み分娩」を経験していた(16/32施設)。その背景には、未婚、未成年、3人目以上の経産婦などが見られた。母体の合併症罹患率、早産率、帝王切開率等は高率であった。また、分娩費用の未払い等も高率であった。

●**妊産婦のDV(ドメスティック・バイオレンス)被害** 授業の課題として当研究室の大学院生が作ったものを改定し、妊産婦へのDV啓発パンフレットを作成した(配布予定)。当研究室では現在、このパンフレットの配布とともに、周産期医療の現場の助産師が経験したDV被害妊産婦の調査を開始している。

### 2. 子育てハイリスク群への支援のための医療スタッフの養成

「かかりつけ医のいない妊婦」や「飛び込み分娩の妊婦」も、分娩時には産科を通過する(自宅で産み捨てる例はあるが)のだが、困り者として認識はされるものの、このような女性への子育て支援という観点はあまりも持たれていない。また、DV被害妊産婦もある一定の比率で存在しているはずであるが、実態は不明であり、それを見つける目を持つ医療スタッフも少ない。

岡山大学大学院保健学研究科では、岡山大学COE・文部科学省「再チャレンジプログラム」により、助産師、保健師、看護師のためのステップアッププログラムを施行しており、「胎児を観る」、「赤ちゃんを観る」、「子育ては胎児から」などの講演や実習を通して、妊婦や子育て女性を支援するための医療スタッフ育成を目指している(助産ネットURL: <http://www.okayama-u.ac.jp/user/josan/index>)。

### 3. 子育てハイリスク予備軍への介入は?

男女間(男女間に限らないが)の生(ナマ)のコミュニケーションが苦手なケータイ世代の中学生、高校生への働きかけは急務のようである。デートDVや性感染症は勿論だが、子育て支援の観点からも、妊娠、分娩、子育ての覚悟もないまま(大きな覚悟が必要とは言わないが)のできちゃった妊娠(これは、妊娠中絶や飛び込み分娩にもつながる)は問題となっている。思春期の学生に、「赤ちゃんを育てることの楽しさと責任」をイメージしてもらうためには、産婦人科医師や助産師の役割は重要である。

#### プロフィール

##### 中塚幹也

岡山大学大学院保健学研究科 教授  
岡山大学医学部・歯学部附属病院 産婦人科医師

- 岡山大学大学院保健学研究科 中塚研究室 <http://www.cc.okayama-u.ac.jp/~mikiya/index.html>
- 岡山県不妊専門相談センター <http://www.okayama-u.ac.jp/user/hos/funin/index1.html>
- 助産ネット <http://www.okayama-u.ac.jp/user/josan/index>

岡山県倉敷市出身。2人の娘の父親。岡山大学医学部保健学科で看護師・助産師教育を行なうようになって3年目。また、疲労の取れない産婦人科医でもある。「子育ては胎児から」を実践するためにも、安心して分娩できるようにすることが子育て支援の基本であるが、産科医不足は恐ろしい状況になっており、分娩を中止する施設は増加し、残った施設への負担から産科(勤務)医の疲労は蓄積している。